

「不都合な真実」が続出の2020年 東京五輪・パラリンピック

「臭い」「猛暑」「ブラック労働」「原発」

あと1年で解決なるか?



建設が進む国立競技場=6月25日

2020年の東京五輪・パラリンピックで「不都合な真実」が次々と露呈している。海を泳ぐ競技では水質への懸念の声が続出。試行錯誤の猛暑対策は逆効果という調査結果が出たものも。突貫工事で「ブラック労働」の疑いが浮上し、「復興五輪」には疑問の声がやまない。あと1年で解決なるか。

「臭い」スイムコースを「浄化」せよ

「トイレみたいなにおいがある」

8月11日に東京・お台場海浜公園で開かれた水泳のオープンウォータースイミング(OWS)の2020年東京五輪テスト大会。5*(本番は10*)を泳いだ選手らが次々とそう訴えた。さらにその6日後の17日、東京パラリンピックのテスト大会を兼ねたパラトライアスロン(W杯)は会場のお台場の水質が悪化したため、何とスイムが中止に。ラン、バイクによるデュアスロンに変更された。

コースは東京湾の入り江にある。大会組織委員会

大腸菌類の侵入を防ぐため、入り江の口をふさぐように約400mにわたってポリエスチレン製の水中スクリーンを設けた。だが、大会関係者によると、16日午後1時の水質検査で大腸菌の値が国際トライアスロン連合(IITU)の定める上限の2倍を超えた。17日午前3時の時点でスイムの中止を決めたという。

15、16両日午前にお台場トライアスロンの五輪選考会を兼ねたテスト大会は水質に問題はなく、スイムは通常どおり実施されていた。大会関係者は仮説として「台風に伴う強い雨や潮目などの要素が重なった」と述べ、下水施設の処理能力

を超えた汚水が流入した可能性を指摘した。

「わずか2リットの雨量でも流されてしまっています」

こう話すのは、東京の下水道問題についてかねて注目し調査を続けてきた、港区議の榎本茂さんだ。

榎本さんによれば、都内の汚水は各地の水再生センターと呼ばれる処理場を経てお台場などに放流されている。一定の雨量を超える

と放流されるということだが、榎本さんはある可能性を指摘する。

「私の調査では、平均90日に1回放流しています。処理能力を超えたら放流する」としていますが、実際にはいつ放流しているのか

わからないのです」榎本さんは定期的にお台場の放流場所を観察してきた。

「現場に行くと、流したかどうかは「におい」でわかります。放流場所トイレットペーパーが溶けきれず混じった汚水が充滿していました」

榎本さんは早急な「浄化」が必要と訴える。

「汚泥を浚渫したり、きれいな砂を敷き詰めたりして一刻も早くお台場を泳げる海にすることが必要です。東京大会のレガシー(遺産)にもなりません」

世界の下水道事情に詳しい、国連環境アドバイザーでグローバルウォータージャパン代表の吉村和就さんは具体策を提言する。

「隣接する有明水再生センターから放流管を300m延長し、処理水をお台場に放流する。計算上は34日できれいな水に入れ替わります。基準を超える高温化が懸念されます」

「水質を改善する」吉村さんは榎本さん、メーカーとも連携し、実際に都に提案をしているという。組織委は汚水をブロックする方策として、大会時にポリエチレン製の水中スクリーンを3重に設置する方針を示している。

制について高い効果が認められています。来年の本大会においては、万全な体制で臨みたいと考えています(組織委担当者)

今夏の五輪テスト大会で選手たちは猛暑に苦しんだ。8月11日の海の森水上競技場で開かれたポット。照りつける日差しとじっとりとした湿度で、熱中症のような症状になる選手が相次いだ。都内臨海部の最高気温は34度を超えていた。英男子選手はぐったりとした様子で、その後担架で運ばれた。表彰式中にふらつき

「過熱性舗装」は逆効果? 熱中症対策を急げ

と危機感をあらわにして、大会関係者は、「熱中症の規模としては大きく深刻だ」と

同日、お台場海浜公園でのOWSは開始2時間前の水温が29.9度。レース実施の上限である31度を下回ったとはいえ、選手からは「通常の23、24度比比べると息苦しいし、脱水してしまいがち」などの声が上がった。4日後、同じ

会場のトライアスロン女子ではランを通常の半分の5分で実施。それでも、仏選手が熱中症の疑いで救急車で運ばれた。

暑さ対策では奇策も講じられた。8月17日に大井競技場で開かれたホッケードは、選手の体を冷やそうと、水入りの水風呂「アイスバス」が控室に登場。氷はこの日だけで約1トンの分が用意されたという。

だが、インド選手は「湿度が高いので疲れた。日本の暑さは体温コントロールが難しい」と嘆いた。大会関係者によると、昼にあった女子のインドー日本戦で、ピッチ上の気温は最高で39度。日本の高温多湿の暑さは、慣れない外国人選手にダメージを与えたようだ。

「今から舗装を変えるのは間に合いません」医学博士で東京農業大学教

授の榎村修生さんだ。榎村さんの調査チームは、東京都が五輪の暑さ対策として整備している「過熱性舗装」の効果について研究を行い、8月30日に速報値を学会で発表した。

都はマラソンコースを含む都道約136kmに、路面温度の上昇を抑える過熱性舗装などを整備している。約95%に当たる約129kmは18年度末までに整備を終えているという。

榎村さんは7月26日の晴天の日、つまり五輪時の天気に近い条件で過熱性舗装の道路と環境温度を調査。結果は「アスファルト道路が体温温度が高くなり、熱中症などのリスクが高まる」というものだった。

「過熱性というだけあって、照り返しが強くなってしまふ。日が照っている時間では命にかかわる危険な状態になります。特に地上から50cmが最も高温になる。マラソンコースの沿道にも整備されていますから、小さ

お台場海浜公園に設けられたコースを泳ぐオープンウォータースイミングの選手たち=8月11日

写真集 美智子さまのお帽子



遮熱性舗装の路面上の気温と暑さ指数を調べる
東京農業大学の櫻村修生教授=さいたま市

愛用の帽子と飾り花撮り下ろし写真収録 好評発売中 定価2592円(税込)

労働環境については、これまで問題視されてきた。17年、新国立競技場の建設工事に携わっていた建設会社の男性社員(当時23)が自殺。極度の長時間労働による精神疾患が原因として労働が認定された。

今年8月には、大会のメインプレッシャーセンターと国際放送センターになる東京ビッグサイト建設現場で男性作業員(50)が倒れた状態で発見され、搬送先の病院で死亡が確認された。熱中症によるものと見られている。

労働環境が改善されない理由として、伊藤弁護士は現場が声を上げにくいからだとみる。「下請け切り」で職を失うことへの恐れがあるのではないかとという。

「熱中症(と見られる症状)で男性作業員が死亡した後には、同じような境遇の作業員たちがツイッターで胸の内を明かしています。みな、命を削るように仕事をしています」

16年から東京大会の労働環境について調査をしてい

と答えている。

伊藤弁護士は言う。

突貫工事で労働組合も動く
ブラツク労働を解決せよ

猛暑は、選手やスタッフ、観客だけの問題ではない。

「建設」現場は、暑さ対策を含む統一的安全対策

熱中症で一度に多くの人が倒れていく。こうなるもはやテロと一緒。今からでも真剣に熱中症対策を考へるべきです」

暑さ対策について、組織委の担当者はこう回答した。「本番大会時にどうどのような暑さ対策を行っているかについて、組織委の担当者はこう回答した。

「複数の零細企業の作業員が集い、それぞれの労働条件の下で働いています。中にファン(扇風機)がついたジャケットをまとっている人もいれば、それがいない人もいます。自分の身は自分で守るしかない。そんな印象を受けました」

「復数の零細企業の作業員が集い、それぞれの労働条件の下で働いています。中にファン(扇風機)がついたジャケットをまとっている人もいれば、それがいない人もいます。自分の身は自分で守るしかない。そんな印象を受けました」

「復興五輪」はまやかかし?
疑問の声が消えない理由

大会理念として掲げられる「復興五輪」について、今も反発の声は少なくない。「やっぱりいらぬ東京オリンピック」(岩波書店)の著者の一人で、成城大学教授の山本敦久さんは、五輪を返上し、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で被災した福島の復興に力を注ぐべきだと話す。

「現場の建設会社ではなく、五輪を開催する組織委なりが、全体統一的な労働安全に関するポリシーを作り、それを労働者たちに周知徹底すべきです」

「現場の建設会社ではなく、五輪を開催する組織委なりが、全体統一的な労働安全に関するポリシーを作り、それを労働者たちに周知徹底すべきです」

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

底してほしい。そのための現場調査をし、アクションを起こしてほしい。調査なんて、いつでもできる。できなはずはないのです」

朝日新聞は今年2月、岩手、宮城、福島の3県の住民にアンケートをした。12年に「いま伝えたい」千人の声で取材した被災者やその保護者のうち、転居先不明の人数を除く767人が対象で、481人から回答を得た。

「現在も1日に百数十トという量の汚染水が発生しています。原子力安全神話は崩壊しています」

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

「復興」という言葉を利用して、実際には東京湾岸や都心部の再開発が進められてきました。五輪の開催は、現実的には復興が進んでいないにもかかわらず、「福島でも五輪を開催した。もう災害の収束時期なのだ」という既成事実を作るために使われるように思います。前日まで開催に反対するつ

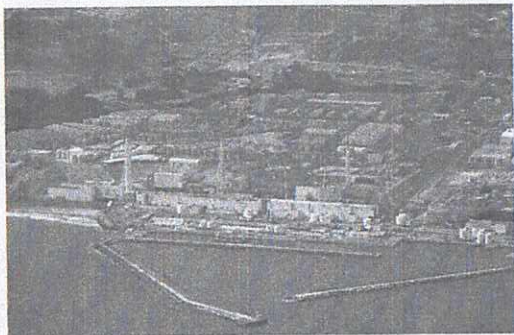
司馬遼太郎と明治

「坂の上の雲」の時代

好評発売中

定価994円(税込)

朝日新聞出版



廃炉作業が続く東京電力福島第一原発。海側に並ぶ1~4号機の建屋の地下に高温度汚染水がたまっている=2019年2月17日